

伊吹山と播隆

— 播隆の基盤となった伊吹山 —

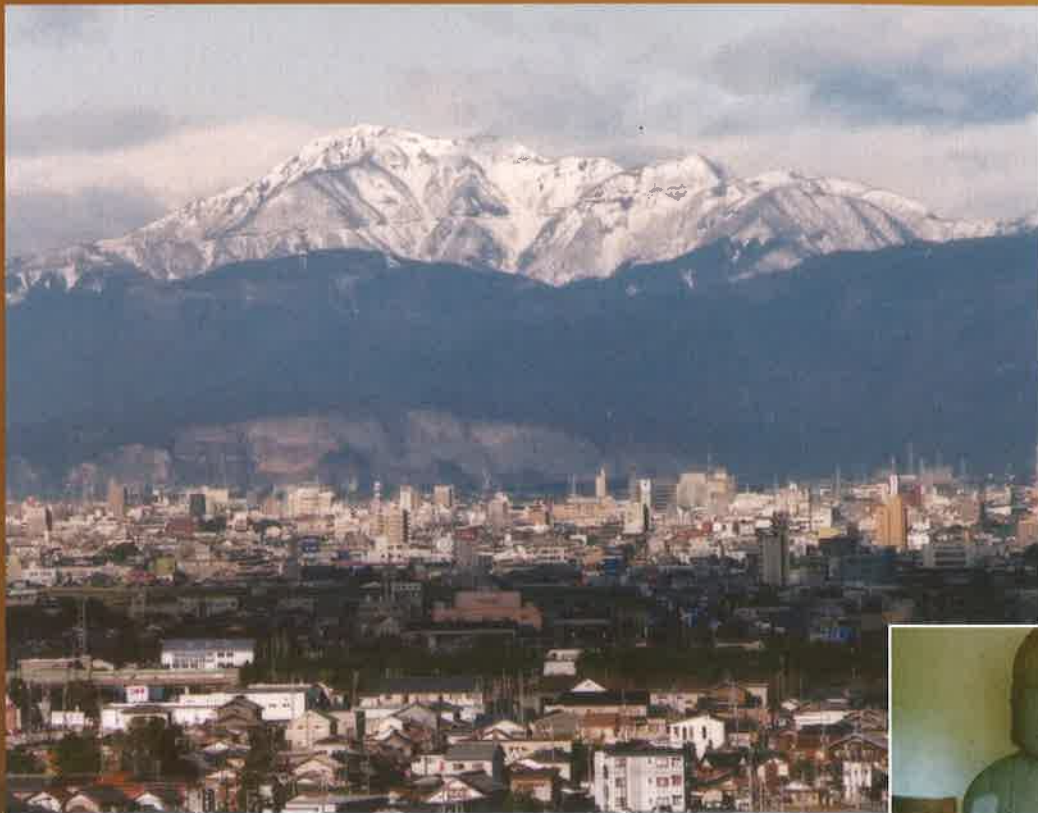
米原市教育委員会

2013.10



執筆／黒野こうき

伊吹山 撮影：寿福 滋
播隆肖像(岐阜県可児市)



伊吹山（岐阜県各務原市より）



播隆屋敷にあった阿弥陀仏
（岐阜県揖斐川町）

伊吹山と播隆

— 播隆の基盤となった伊吹山 —

- 信仰の山・伊吹山…………… 1
- 念仏行者・播隆の生涯…………… 3
- 伊吹山と播隆…………… 6
- 伊吹山周辺の足跡…………… 9

■ 信仰の山・伊吹山

伊吹山は奈良時代の『古事記』『日本書紀』にも語られ、平安時代には七高山（比叡山・比良山・伊吹山・神峰山・愛宕山・金峰山・葛城山）のひとつに教えられた名山である。また、伊吹山麓でくり広げられた天下分け目の決戦、飛鳥時代の壬申の乱、安土桃山時代の関ヶ原の戦い。あるいは神話に登場する日本武尊の活躍、伊吹弥三郎の伝説など、伊吹山は昔から「荒ぶる神」の坐す神の山であった。

伊吹山の標高は1,377m、意外と低いのである。しかし、風の道、伊吹おろしといわれる地理的な関係からか、冬の積雪は激しく、今も新幹線、高速道路泣かせなのである。低いわりに雪は深く、その白峰はひとときわ輝き、現代においても霊峰の名に恥じない存在である。伊吹山は古くから信仰の山として仰がれ、尊ばれてきた。

伊吹山は古代より山岳信仰の山であった。山を敬い、その恵みに感謝を捧げる日本古来の神信仰に、渡来した道教、仏教から派生した山林修行の行者、僧侶らの行いが加味し、山々の神と仏教が融合し、神仏習合の修験道しゅげんどうが成立するのは平安時代後期以降のことである。そして、役小角えんのおづぬ・役の行者えん(7世紀～8世紀の大和国葛城山の呪術師)が後世になって理想化され、修験道の開祖として語られるようになる。奈良時代の僧、越の大徳と呼ばれた白山開祖の泰澄たいちようが伊吹山に登拝したとの伝承がある。



伊吹山頂



山頂弥勒堂 撮影：米原市教育委員会

伊吹山の山岳信仰の筆頭にあげるべきは三修さんしゅう(829～900)である。七高山のひとつであった伊吹山、延喜式にも記録されている伊夫岐神社。平安時代の仁寿年間(851～854)に三修が伊吹山に入峰、それまでの伊吹山寺を元慶2年(878)に定額寺じやうがくじにした。そうして平安時代後期から鎌倉時代にかけて伊吹山中の寺々は規模を拡大し、伊吹山寺は後に弥高寺、太平寺、観音寺、長尾寺の四ヶ寺に分化していく。その盛況の様子は、たとえば弥高寺は弥高百坊などと称され、実際の寺坊じぼうの数は把握できないが、かなりの寺坊が山中に林立していたのである。また、伊吹山中の伊夫岐神社、三之宮神社と伊吹山寺の四ヶ寺は互いに勢力争いを展開しながらも表裏一体の関係を保ちつつ発展していったのである。中世になると伊吹山寺の寺坊はしだいに政治権力に取り込まれ、城塞化し、その戦乱に巻き込まれ、江戸時代になると衰退していった。それでも山中にはわずかながらも寺坊が残り、修験者、修行僧が残っていたようである。

江戸時代の記録『近江輿地志略』(享保19年刊(1734))によれば、弥高寺は6坊、観音寺は14坊、太平寺は3坊、長尾寺は1坊となっている。近世になって衰退したとはいえ、まだその面影は残っており、山頂の弥勒堂をめぐり修験の道、禅定道ぜんじやうどうを巡って山林修行に励む行者が存在していたことは確かである。



太平寺跡 (滋賀鉱産(株) HPより)



三之宮神社

伊吹山はいわば石灰岩の山塊であるため、巨岩、奇岩が山中に数多く存在し、行場となる岩場に事欠かない。行者はそれらの行場、岩屋を巡って修行した。伊吹山は標高が低いわりには気候の変化は激しく、風、雪、霧、雨が多く、終日快晴の日は年間二十日程度しかないという。日本武尊の伝承を生む、文字通り荒ぶる神の坐す山であり、修行して神の力を得るには適した山なのである。

やがて伊吹山を舞台にした、庶民とともに生きた江戸時代の民間宗教者、聖と呼ばれている円空えんくうと播隆ばんりゆうが登場する。ともに伊吹山での山岳修行、禅定が基盤となった行者である。円空は江戸時代の前期、播隆は後期に生きた人物である。

※註 禅定：霊山などで山岳修行すること
定額寺：国家公認の寺院



播隆肖像画
(岐阜県可児市)

播隆は江戸時代の後期、天明6年(1786)に越中国新川郡河内村(富山県富山市河内)中村佐右衛門(順信)の二男一女の次男として生まれた。生家は代々浄土真宗の道場(寺院の代わりをした家)をつとめた信仰の篤い家柄であったといわれている。10代のある時期にふるさとを出た播隆は、大阪あるいは京都で宗教遍歴をしたようで、文化元年(1804)19歳のときに尾張国の浄土宗尋盛寺(名古屋市千種区城山)の性誉上人に弟子入りした。その間の詳しいことは不明だが、和州阿辺ヶ峰の見仏上人の弟子になって仏岩と称したともいう。文化11年(1814)、播隆29歳のときに浄土宗関東十八檀林の一つであった江戸本所の霊山寺(東京都墨田区横川)で正式な僧となった。また、文政元年(1818)の33歳のころには山城国伏見の一念寺(京都市伏見区下鳥羽)の鳩誉上人のもとで修行をしていたようである。求道に燃えた播隆は、安泰をむさぼる当時の寺院仏教になじまず、修行の場を山林、山岳に求めた。



播隆生誕の地(富山市河内(旧大山町))



播隆開山寺院の正道院(岐阜市)



播隆の名号軸をかかげておこなわれる念仏行事
(岐阜県可児市)



播隆の名号軸をかかげておこなわれる
百万遍念仏供養(愛知県犬山市)



播隆念仏講(岐阜県関市)

播隆が基盤を築いたのは伊吹山での山岳修行であった。播隆がいつ頃から伊吹山に入峰したのか不詳であるが、文政年間(1818~1829)の40代の頃である。同6年(1823)には笠ヶ岳再興を成す。その他にも南宮山奥の院(岐阜県垂井町)、杓子の岩屋(岐阜県高山市)、伊木山(岐阜県各務原市)、迫間不動(岐阜県関市)など各地の岩屋、修行場で修行しており、厳しい戒律を守りながら死ぬまで修行僧でありつづけた。その修行は激しく、伊吹山禪定の時にすでに多くの人々がそんな播隆のもとに参集している。

伊吹山山麓での足跡は濃く、岐阜県掛斐川町の開山寺院・一心寺、岐阜市の開山寺院・正道院、美濃、尾張に今も遺る播隆念仏講(播隆の名号軸を囲んで勤める講)、滋賀県米原市内などに残る足跡などに播隆の教化の面影をしのぶことができる。

念仏修行の途上に伊吹山禪定、笠ヶ岳再興、槍ヶ岳開山、穂高登拝といった山岳史上の輝かしい功績を遺した播隆であったが、反面、播隆は積極的に里の人たちと交流した。山を下りた播隆は精力的に各地を巡錫し念仏を広めた。里の播隆の活躍はめざましく、各地に残る播隆名号碑は現在82基が確認され、播隆名号軸、歌軸などの墨跡は約150幅余り、確認することができた播隆念仏講および播隆関連の念仏行事は25ヶ所ほどあった。

飛騨の高山市上宝町にやってきた播隆は杓子の岩屋に籠り、地元の本覚寺の椿宗、里人らとともに笠ヶ岳の再興を成す。播隆はこのとき御来迎を拝し(ブロッケン現象)、岩屋を発心の地と定め、再興した登山道に一里ごとに石仏を配置、山頂に上品上阿弥陀仏を安置、笠ヶ岳そのものを浄利九品の蓮葉台とした。すなわち笠ヶ岳の山体が御来迎で現れる阿弥陀如来の台座となる。登拝信仰するものにとって山頂でブロッケンに出会うことは仏の実現なのである。のちに槍ヶ岳開山と進む播隆にとって、笠ヶ岳で拝した御来迎は登拝信仰の確立となった。笠ヶ岳再興を成した播隆はいったん伊吹山へ帰る。



笠ヶ岳

播隆は文政9年(1826)に1回目の槍ヶ岳登拝を成し(初登頂)、同11年には槍ヶ岳の山頂に阿弥陀仏などの三尊を安置して槍ヶ岳開山を成す。そのとき穂高岳には名号碑を安置している。その後、天保4、5、6年にも登り、播隆は槍ヶ岳登拝修行を5回行なっている。播隆は開山ということばを使わずに開闢かいびやくといっており、その目的が達成されたのは4回目の天保5年(1834)のことであった。山頂を広げ、先に安置した三尊に新たに釈迦如来を加えて四尊として槍ヶ岳寿命神とした。そして槍の穂先に藁で作った「善の綱ぜん つな」をかけた。善の綱とは仏と仏縁を結ぶ綱のことで、善の綱をたどって槍の山頂に立ち、そこで御来迎を拜せばまさに仏を実感することになる。

播隆の生涯を槍ヶ岳開山物語だけで語ることはできない。その基盤を築いたのは伊吹山禅定であり、山の播隆を支えたのは里の念仏講の人々であった。天保11年10月21日、播隆は中山道太田宿(岐阜県美濃加茂市)の脇本陣・林家でその生涯を閉じる。行年55歳であった。

念仏行者・播隆はつねに庶民とともに生き、庶民の中で信仰を実践した民間宗教者であった。そんな近世の聖の一人として播隆を語り伝えてゆきたい。

※註

ブロッキン現象：山頂などで後から光がさして前方の霧や雲に自分の影が映り、そのまわりに虹のような光の輪ができる

善の綱：仏像の手に綱をかけて長く引き、参詣者がその綱にふれることで仏と縁を結ぶ



槍ヶ岳寿命神の軸がかかげられる播隆念仏講(長野県松本市)

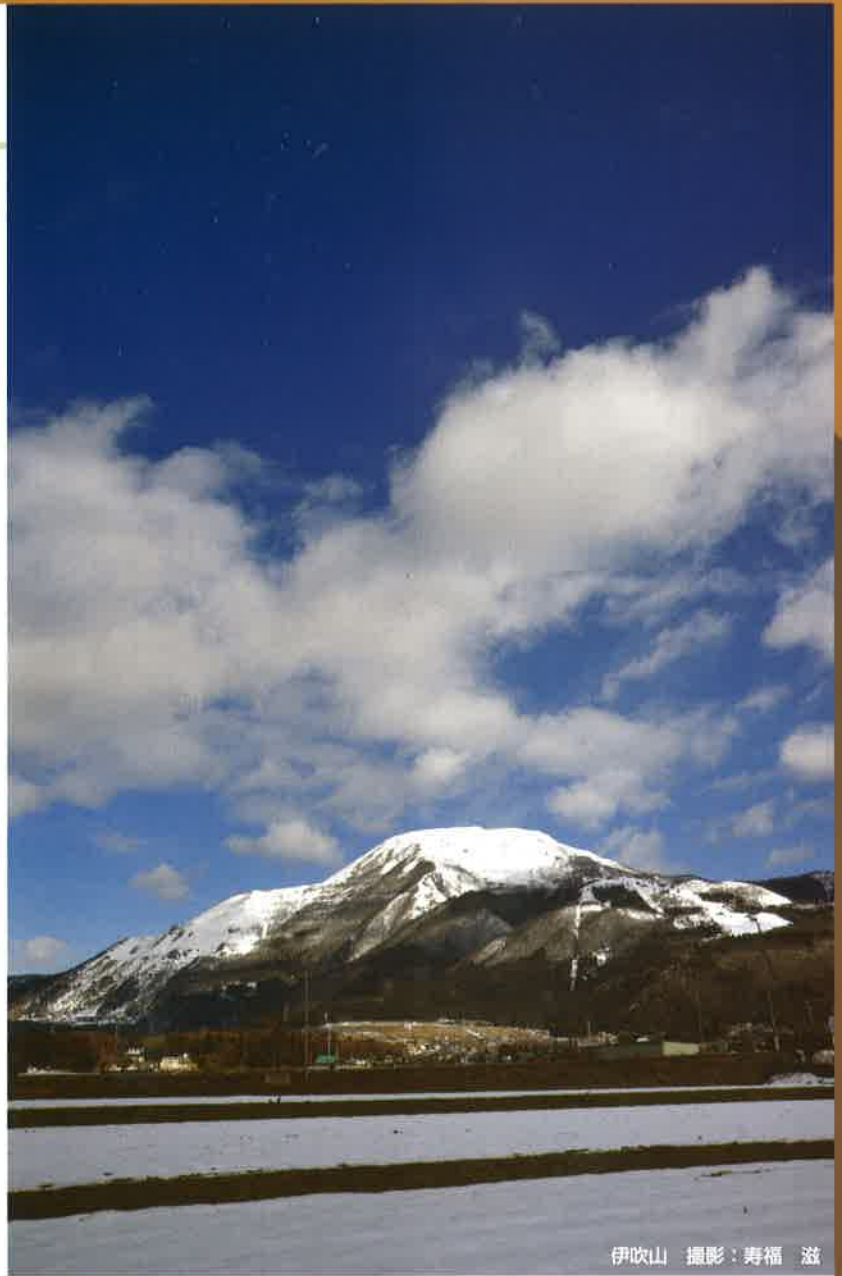


播隆終焉の地・中山道太田宿脇本陣林家(岐阜県美濃加茂市)

■伊吹山と播隆



伊吹山で記された播隆作念仏起請文(岐阜県大野町)



伊吹山 撮影：寿福 滋

伊吹山禪定の前、播隆は伊吹山と向い合う南宮山(419m)の山上で修行していた。南宮山の奥の院さんくうしゅうぎょうで山籠修行していた播隆は靈夢によって伊吹山へと移っていく。『行状記』によれば3度、あるいは4度の参詣、山籠修行の記述がある。

また、播隆が富山の生家に送った文書の中に『濃州一宮南宮奥院山籠記』には文政7年秋の末か初冬に南宮山奥の院で修行した様子が記述されており、前年の6年にも参詣している。

それらの史料によれば、播隆が修行地を探しているときに旅先の人から南宮山奥の院を紹介されて有縁の地とし、七日間の無言の別時、あるいは一夏九十日の念仏行などを厳修したという。

『行状記』に……南宮山奥院と申し神社ありて、本尊観世音菩薩と申すは、世に比類なき靈仏なれば、彼院に参籠で念仏行を修し玉えがしと、聞き玉えば師は雀踊満悦玉いて、それぞれ正しく我有縁の地ならめと、夫より直ちに南宮山の奥の院に参籠りて念仏三昧を修し玉えりなん……とある。

元禄期前後に南宮山中には院や坊が15坊ほどあった。行状記に……或夜の靈夢に、大悲観世音の御告げあり、近江の伊吹の嶺頂にて、一千日の別時念仏を行すべしと、現ともなく幻ともなく、感涙胸に溢れて最尊とく悦び玉い、南宮山の一夏を結願畢りて、勇み伊吹の高峰の登山玉えり……とあり、播隆は南宮山から伊吹山に移ってゆく。



播隆の錫杖頭(一心寺蔵)

『行状記』に「伊吹山千日別時の事」という章がある。伊吹山には播隆屋敷と呼ばれる播隆の拠点があった。そこには高所にもかかわらず三間に八間の草庵があったという。当時そこにあった阿弥陀如来の石像(約75cm)は山を下って岐阜県揖斐川町(旧春日村笹又)に残されている。銘に……文政八年八月 願主播隆上人講中……とある。『行状記』によれば……江州越前美濃尾張の四ヶ国より群る人ぞ市の如く山の如く……とあり、伊吹山山麓の滋賀県、岐阜県、そして愛知県、福井県からも播隆を慕って人々が集まってきた。

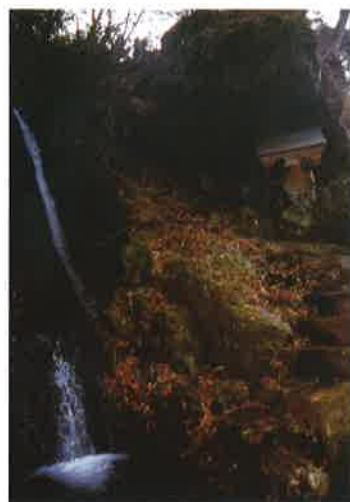
集まった人々に播隆は……十念に日課に説法に請がままに師は一枚起請文を説示し玉へば……と『行状記』にあり、当時広く配布されていたと思われる木版刷りのものが山麓の池田町、大野町の某家に残されている。それは法然の一枚起請文を播隆が播隆風に加筆改作した「念仏起請文」と



播隆屋敷跡(伊吹山)

言うべきもので、日付は文政8年1月24日、木版刷りなのである程度の枚数が配布されていたと思われる。播隆屋敷跡は伊吹山ドライブウェイの10.2km地点の県境から林道を歩いて15分ほど入った杉木立のあるところ、杉の大木が林立した行者杉とも呼ばれている場所である。旧春日村の区分で池谷の長尾とも呼ばれ(池谷ヶ峰とも)、杉木立の中に平地があり脇には水溜まりのような水場があり、平成2年9月に一心寺の信者さんたちによって播隆上人修行屋敷跡という記念碑が建てられた。

岐阜県関ヶ原町玉の集落から伊吹山へ小一時間ほど登ったところ(地元では砂羅山と呼んでいる中腹)に目醒の滝があり、播隆は一枚歯の高下駄をはいて岩場をすたすたと登り、冬でも単衣で念仏を唱えて修行したと言われ、子らに虫を殺すな、父母の言うことをよく聞けよと説いたという。滝は二段になっており脇には祠がある。その中には……文政九年 願主播隆上人講 玉村惣中江祭□ 七月……と台座に刻まれた30cmほどの青銅製のお不動様が鎮座している。玉では毎年2月26日に不動祭を勤める。雪の多い年は現地で行わず、里の集落センターで行い、近年は26日に近い日曜日に勤めて餅を配る。



目醒の滝(伊吹山)

この他に播隆が修行したと伝わる行場に風穴、八つ頭、平等岩などがある。山麓に残る川合区有文書(揖斐川町)、奥田家文書(関ヶ原町)、あるいは生家の中村家文書(富山市)などから播隆が南宮山奥の院、伊吹山で修行したのは文政6~9年の頃で、初めて入峰したのがいつであったのかは不詳である。文政年間、播隆は伊吹山を拠点に活動していた頃に笠ヶ岳再興、槍ヶ岳開山を成したのである。



目醒の滝でおこなわれる不動祭(岐阜県関ヶ原町)

※註

行状記：明治26年に弟子たちによって刊行された播隆の一代記『開山曉播隆大和上行状略記』の略記

■播隆略年譜

- 天明6年(1786) 1 越中国新川郡河内村(富山市河内)の中村佐右衛門(順信)の二男一女の次男に生まれる
- 文化元年(1804) 19 尾張国の浄土宗・尋盛寺(名古屋市千種区城山)の性誉上人に弟子入り
※行状記では大和国の阿辺ヶ峰の見仏の弟子となり仏岩と称す
- 11年(1814) 29 江戸本所の靈山寺(東京都墨田区横川)で浄土宗の正式な僧となる
- 文政元年(1818) 33 この頃、山城国の一念寺(京都市伏見区下鳥羽)の蝸誉のもとにあり
- 6年(1823) 38 8月1日、笠ヶ岳再興を成す
この年、南宮神社、南宮山奥の院に参詣す
- 7年(1824) 39 秋、南宮山奥の院に山籠す
- 8年(1825) 40 1月24日、念仏起請文を書く
3月2日、濃州一宮南宮奥院山籠記を書く
この頃、伊吹山で修行。8月に阿弥陀仏を播隆屋敷に安置する
- 9年(1826) 41 3月20日、不動和讃を書く(岐阜県関ヶ原町玉)
8月、1回目の槍ヶ岳登山、初登頂
- 11年(1828) 43 7月20日、2回目の槍ヶ岳登山、山頂に阿弥陀仏など三尊を安置し開山を成す
8月1日、穂高岳に六字名号碑を安置する
- 天保元年(1830) 45 天保年間の初期(寺伝では元年)、美濃国に播隆開山寺院の一心寺が建立される
- 4年(1833) 48 8月、3回目の槍ヶ岳登山
- 5年(1834) 49 6月18日、4回目の槍ヶ岳登山、8月12日に下山。その間、先に安置した三尊に釈迦を加えて四尊とし槍ヶ岳寿命神とする
山頂に藁で作った善の綱をかける(後年、藁から鉄鎖に)
8月1日、槍ヶ岳の開闢成る
10月末、越前国丸岡城下の安楽寺(福井県坂井市丸岡町)に巡錫、護城山で冬安居
- 6年(1835) 50 6月24日、5回目の槍ヶ岳登山
- 11年(1840) 55 10月21日、中山道太田宿で死去、行年55歳

※西暦の次の数字は年齢

<平成25年8月、黒野こうき作成>



播隆関係史跡等紹介
大田市立大町山岳博物館作成

■伊吹山周辺の足跡

滋賀県内で現在のところ播隆の史料が確認されているのは米原市内だけである。伊吹山の山麓、旧伊吹町大清水の個人宅に播隆名号軸が2幅、春照の個人宅に2幅、旧山東町志賀谷の個人宅に3幅、旧伊吹町伊吹の個人宅に帰命尽十方無量光如来の軸が1幅ある。播隆名号碑は志賀谷の志賀神社と個人の墓にそれぞれ1基の計2基ある。



志賀谷墓地の播隆名号碑



志賀神社の播隆名号碑(米原市志賀谷)

播隆が開山となっている寺院は揖斐川町の一心寺、岐阜市正道院の二ヶ寺である。地元でバンリュウさんと呼ばれている一心寺、その創建は天保元年が寺伝であるが、天保元年は文政13年12月10日に改元されて天保となったので、元年といっても20日間ほどしかなく、実質的には文政13年が大部分である。天保3年の銘が刻まれた当時の瓦がでてきたこともあり、創建を天保初期の頃と考えている。一心寺は城台山の山頂に方四間の二重屋根の立派な本堂が建てられ、当初は城台山播隆院阿弥陀堂と称した。その後、二世・隆盤によって阿弥陀堂は阿弥陀寺と改められ、五世・坂口隆説によって明治12年に浄土宗知恩院の末寺として一心寺と改称。明治24年の濃尾大地震によって堂宇が倒壊、同28年に山頂から現在地の中腹に再建された。播隆が死去した後も一心寺は念仏道場として栄え、播隆の法灯が継承されている。

一心寺のある揖斐川町内には約20幅ほどの墨跡が残されており、池田町、大野町、神戸町、垂井町、関ヶ原町など伊吹山麓に播隆の足跡は濃く、多くの人々が播隆に帰依していたことがうかがえる。



米原市内の播隆名号軸・名号碑の分布



播隆開山寺院の一心寺(岐阜県揖斐川町)



播隆六字名号 (米原市春照個人蔵)
撮影：米原市教育委員会



播隆六字名号 (米原市志賀谷個人蔵)
撮影：米原市教育委員会

南宮大社は播隆ゆかりの大社だが、滋賀県多賀町の多賀大社は笠ヶ岳ゆかりの大社である。文政6年に播隆が書いた『迦多賀嶽再興記』^{かたがたけさいこうき}では笠ヶ岳の山名に迦多賀が使われており、本覚寺に残る同9年の木札「迦多賀嶽大権現玉居」には多賀大明神を笠ヶ岳に勧請とある。

また、『迦多賀嶽再興記』に……八朔ノ節ナレバ山開ノ吉祥日ト定メ……とあり、^{しんしゅうやりがたけりやく}『信州鎗嶽略縁起』^{かいびやく}にも……八月朔日本尊安置の供養をなさん……とある。笠ヶ岳の再興、槍ヶ岳の開闢、その記念となる日とともに8月1日の朔日^{ついたち}としているが、多賀大社の月参りは「おついたちまいり」、毎月の朔日である。

多賀大社と播隆をつなぐ直接的な史料は確認されていないが、記録に残っていない社僧^{しゃそう}、坊人^{ぼうにん}の集団と関わりがあったのではないかと思われる。播隆の師であったといわれている見仏^{けんぶつ}、蝸誉^{かつよ}の存在にも不詳な点があるが、南宮大社、多賀大社の社僧のような集団、存在の中に播隆を知る手掛かりがあるのではないかと思われる。

※註 社僧：神仏習合の神社で仏事を通じて神に奉仕する僧侶。参詣者の世話やお札を配ったりして直接庶民と接していた。御師、坊人



本覚寺の迦多賀嶽大権現玉居 (岐阜県高山市)



多賀大社 (滋賀県多賀町)

黒野こうき
(くろの こうき)

昭和27年、愛知県岡崎市に生まれる。
画家・詩人・地方史研究家。「ネットワーク播隆」代表

【主な著作】『円空山河』『美濃加茂ふるさとファイル播隆』『賢治の風光』『岐阜の岡本一平』
『播隆研究 第1号～13号』編集 など

★掲載した写真については、撮影者の明記がないものは、すべて黒野こうき氏に提供いただきました。御礼申し上げます。



【執筆】 黒野こうき（ネットワーク播隆）

【協力者・協力機関（敬称略）】

福永二郎・鹿取保一・高木義人・林賢司・正道院・本覚寺・高山市上宝ふるさと歴史館・揖斐川町歴史民俗資料館

伊吹山と播隆 — 播隆の基盤となった伊吹山 — 2013.10

米原市教育委員会 〒521-0242 滋賀県米原市長岡1050-1 TEL0749-55-4552 FAX0749-55-4556